

いせものがたり
伊勢物語(二)

十八

むかし、なま心ある女ありけり。をとこ近うありけり。女、歌よむ人なりければ、心見むとて、菊の花のうつろへるを折りて、をとこのもとへやる。

くれなゐ
紅にほふはいづら白雪の枝もとをゝに降るかとも見ゆ
をとこ、知らずよみによみける。

紅にほふがうへの白菊は折りける人の袖かとも見ゆ

二十

むかし、をとこ、大和にある女を見て、よばひてあひにけり。さて、ほど經て、宮づかへする人なりければ、歸りくる道に、三月ばかりに、かへでのみぢのいとおもしろきを折りて、女のもとに道よりいひやる。

君がためた折れる枝は春ながらかくこそ秋のもみぢしにけれ
とてやりたりければ、返事は京に來著きてなむ持てきたりける。

いつの間にうつろふ色のつきぬらむ君が里には春なかるらし

二十二

むかし、はかなくて絶えにけるなか、なほや忘れざりけむ、女のもとより、

憂きながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつゝなほぞ戀しき

といへりければ、「さればよ」といひて、をとこ、

あひ見ては心ひとつをかはしまの水の流れて絶えじとぞ思ふ

とはいひけれど、その夜いにけり。いにしへゆくさきのことどもなどいひて、

秋の夜の千夜を一夜にならずらへて八千夜し寢ばやあく時のあらむ

返し、

秋の夜の千夜を一夜になせりともことば残りてとりや鳴きなむ
いにしへよりもあはれにてなむ通ひける。

むかし、をとこ、片田舎にすみけり。をとこ、宮づかへしにとて、別れ惜しみて行きけるまゝに、三年こざりければ、待ちわびたりけるに、いとねむごろにいひける人に、今宵あはむとちぎりたりけるに、このをとこきたりけり。「この戸あけたまへ」とたゞきけれど、あけで、歌をなむよみて出したりける。

あらたまの年の三年を待ちわびてたゞ今宵こそにひまくらすれ
といひだしたりければ、

梓弓あずきゆみま弓つぎゆみ櫛弓年つぎゆみをへてわがせしがごとうるはしみせよ

といひて、去なむとしければ、女、

梓弓引けど引かねど昔より心は君によりにしものを

といひけれど、をとこかへりにけり。女、いとかなしくて、しりにたちて追ひゆけど、え追ひつかで、清水のある所に伏しにけり。そこなりける岩に、およびの血して書きつけける。

あひ思はで離れぬる人をとゞめかねわが身は今ぞ消えはてぬめる
と書いて、そこにいたづらになりにけり。

四十

むかし、わかきをとこ、異しうはあらぬ女を思ひけり。さかしらする親ありて、思ひもぞつくどて、この女をほかへおひやらむとす。さこそいへ、まだおひやらず。人の子なれば、まだ心いきほひなかりければ、とゞむるいきほひなし。女も卑しければ、すまふ力なし。さるあひだに、思ひはいやまさりにまさる。俄に親この女をおひうつ。をとこ、血の涙をながせども、とゞむるよしなし。率て出でて去ぬ。をとこ、泣く泣くよめる。

出でていなば誰か別れの難からむありしにまさる今日はかなしも

と読みて絶えいりにけり。親あわてにけり。なほ思ひてこそいひしか、いとかくしもあらじと思ふに、眞實に絶えいりにければ、まどひて願たてけり。今日の入相ばかりに絶えいりて、又の日の戌の時ばかりになむからうじていき出でたりける。昔の若人は、さるすける物思ひをなむしける。今の翁、まさにしなむや。

六十二

むかし、年ごろおとづれざりける女、心かしくやあらざりけむ、はかなき人のことにつきて、人の國なりける人につかはれて、もと見し人の前に出で来て、物食はせなどしけり。夜ざり、「このありつる人たまへ」とあるじにいひければ、おこせたりけり。をとこ、「我をば知らずや」とて、

いにしへのにほひはいづら櫻花こけるからともなりにけるかな
といふを、いと恥づかしと思ひて、いらへもせでゐたるを、「などいらへもせぬ」といへば、「涙のこぼるゝに、目も見えず、ものもいはれず」といふ。

これやこの我にあふみをのがれつゝ年月ふれどまさりがほなき

といひて、衣脱ぎてとらせけれど、捨てて逃げにけり。いづちいぬらむとも知らず。

七十五

むかし、をとこ、「伊勢の國に率ていきてあらむ」といひければ、女、

大淀の濱におふてふみるからに心はなきぬ語らはねども

といひて、ましてつれなかりければ、をとこ、

袖ぬれて海人の刈りほすわたつうみのみるをあふにてやまむとやする

女、

岩間より生ふるみるめしつれなくは潮干潮満ちかひもありなむ

又、をとこ、

涙なみだにぞぬれつつしほる世の人のつらき心は袖そでのしづくか
世にあふことかたき女になむ。

八十四

むかし、をとこありけり。身はいやしなから、母なむ宮なりける。その母、長岡ながおかといふ所に住み給ひけり。子は京に宮づかへしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうです。ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。さるに、十二月しはすばかりに、とみのこととて御文おんふみあり。おどろきて見れば、歌あり。

老おいぬればさらぬ別わかれのありといへばいよいよ見まくほしき君かな
かの子、いたうち泣きてよめる。

世の中にさらぬ別れのなくもな千代ちよもといのる人の子のため

八十六

昔、いとわかきをとこ、わかき女をあひいへりけり。おのおの親ありければ、つゝみていひさしてやみにけり。年ごろへて、女のもとに、なほ心ざしはたさむとや思ひけむ、歌をよみてやれりけり。

今までに忘れぬ人は世にもあらじおのがさまさま年のへぬれば
とてやみにけり。をとこも女も、あひはなれぬ宮仕みやつかへになむ出でにける。

九十四

むかし、をとこありけり。いかゞありけむ、そのをとこすまずなりにけり。後に男ありけれど、子あるなかなりければ、こまかにこそあらねど、時どきものいひおこせけり。女がたに、繪えかく人なりければ、かきにやれりけるを、今のをとこのものすとて、一日二日ひとひふつかおこせざりけり。かのをとこ、いとつらく、「おのがきこゆる事をば、今までたまはねば、こ

とわりと思へど、なほ人をば恨みつべきものになむありける」とて、弄じてよみてやれりける。時は秋になむありける。

秋の夜は春日わするゝものなれや霞に霧や千重まさるらむ
となむよめりける。女、返し、

千重の秋ひとつの春にむかはめや紅葉も花もともにこそ散れ

百五

むかし、をとこ、「かくては死ぬべし」といひやりたりければ、女、

白露は消なば消ななむ消えずとて玉にぬくべき人もあらじを
といへりければ、いとなめしと思ひけれど、心ざしはいやまさりけり。

百七

むかし、あてなるをとこありけり。そのをとこのもとなりける人を、内記にありける藤原の敏行という人よばひけり。されど若ければ、文もさをさしからず、ことばもいひ知らず。いはむや歌はよまさりければ、かのあるじなる人、案を書きて、かゝせてやりけり。めでまどひにけり。さて、をとこのよめる。

つれづれのながめにまさる涙河袖のみひぢて逢ふよしもなし

返し、例のをとこ、女にかはりて、

あさみこそ袖はひづらめ涙河身さへ流ると聞かばたのまむ

といへりければ、をとこいいたうめでて、今まで巻きて、文箱に入れてありとなむいふなる。をとこ、文おこせたり。得てのちの事なりけり。「雨の降りぬべきになむ見わづらひ侍る。身さいはひあらば、この雨は降らじ」といへりければ、例のをとこ、女にかはりてよみてやらす。

かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身をしる雨は降りぞまされる

とよみてやれりければ、蓑も笠もとりあへで、しとどに濡れて惑ひ來にけり。

百二十三

むかし、をとこありけり。深草ふかくさにすみける女を、やうやうあきがたにや思ひけむ、かゝる歌をよみけり。

年をへて住みこし里を出でていなばいとゞ深草野とやなりなむ
女、返し、

野とならば鶉うづちとなりて鳴きおらむかりにだにやは君は來ざらむ
とよめりけるにめでて、行かむと思ふ心なくなりけり。

百二十五

むかし、をとこ、わづらひて、心地死こころちぬべくおぼえければ、

つひにゆく道とはかねてききしかどきのふ今日けふとは思はざりしを